

資料(10)

マラテスタ「無政府主義組織論」(昭和四年1929、地底社刊)

一、

偶然の事から「無政府主義総聯盟の基礎」(草案)と題する仏文の小冊子が手に入った。

(注) 伊太利に於ては反ファシズムの文書の流布が許されていないことは読者も周知のことであろう。

是は無政府主義の組織案を取扱ったものであって、在外ロシア系無政府主義者諸君の一同から発せられ、主としてロシアの同志に向けて提出されたものの如く見受けられる。併し、その取扱う問題に凡ゆる無政府主義の同志に興味あるものであるが、尚、それが仏文を以て書かれていた事実からして、万国の同志の相互批判を求めているものであることは明かな事実である。兎に角、何れにせよこの当面の組織案が、無政府主義の原理と調和するものであるか否か、また、その案の実行が真に無政府主義の爲めに役立つものであるかを検討することは、唯、このロシアの同志諸君にとつてのみならず均しくすべての同志諸君にとつても何等かの意義を持つ事であろう。

この案を起草するに至った動機は、起草者達によれば無政府主義者が、過去並に現在に於て社会政治上の事件に関して影響力のない事は、無政府主義の理論的並に實際的価値に対しても、また同様に彼等の数、彼等の勇氣、彼等の犠牲的精神に対しても適わしからぬことであり、かくの如き比較的成績な結果は、真摯、かつ實際的な一大組織の欠如にその主要原因があると、彼等起草者諸君が思惟される為であると言う。

この点までは私も原則に同意し度い。

由來、組織というものは、ただに團結と連帶の思想の現実的実行たるのみならず、一般にいつて社会生活に関する当然、且、必須の予想である。一般に人類の集合社会に於て、また個々の人間群に於て、将来到達せらるべき共通の目的がある限り、組織は万人の身に迫る必須事である。

人間は単独では生活する事を望まぬし、またそれは不可能でもある。彼が眞の人間となり、また彼の物質的並に精神的欲望を充分に充足する為には、彼はその同胞と集合社会と團結とに於てする以外には方法がないのであるから、組織を持たぬ者は総べて、あるいは仮令、それだけの力がないにせよ、或はまた、仮令、それに対して緊急な必要を感じないにせよ、指導的位置に立つ階級若しくは群団より出で、しかも常に他人の労働を私利のために搾取せんとする自分以外の人間によつて、指導せられるような組織のもとに苦しまねばならぬことは、その宿命となつてくるのである。

而して、少数の特権階級によって民衆に加えられた数千年の永い抑圧は、常に大多数の人間から、自らの地位に目覚めて生産と消費の為に、また、その時々の特権者とを排除するために、共通の利害と感情を基礎として自分以外の生産者と組織する能力を奪うという結果をもたらすに過ぎない。無政府主義者はその自由なる組織をつねに作りなすその根本原理として、かくの如き社会状態より脱却せんと企図しているのである。ここにいう自由なる組織とは構成員の自由意志によって結ばれ、かつ存続されて如何なる種類の確権をも認めない、即ち一個人が他人の意志に対して強制を加えることを認めない所の組織である。無政府主義者が、人類の全社会がそれを基礎として打ち建てられねばならぬと確信している原則を、その個人生活に於てもまた、その協同の生活に於ても、そのままこれに適用せんとするならば是は全く当然のことにすぎない。

(注) マラテスタはここに *Parti* なる語を用いているが、由来この語はラテン語の *partie* に起原する語でここでは一般強権社会思想に対する反強権思想の組織を指す。強権の組織の「政党」「党派」「党派」を意味するのではない。「分派」「朋党」「同盟」の意である。ドイツ語の訳者フリッツ・エーテルは特に断つて *anhangenschaft* と訳している。後段、独訳に *Partei* と訳出されている場合に於ても、訳旨はこの「同盟」と訳語を採ることにする。

従来、ある反対論者は無政府主義者の中には如何なる組織にも反対する者があつたというような議論をしたものであつた。しかし、吾々がこのことに関してたかかず数多くの、然り、極めて数多くの討論に、あるいは揚足取りに墮し、或は個人的反目によって激化される場合に於てすら、全く、その形態に関する議論に限られて、決して組織の本質に関するのではないのである。口をきわめて組織に反対する同志も、また等しく組織し、而も、しばしば彼等が真面目に何事かを企図する場合には、他よりも一層優れた組織を持つというのは事実である。繰り返して言うが、組織の必要であることは正に一つの事実であつて、ここに議論の余地は残されていないのである。

従来、無政府主義者に依つて実際に行われた組織よりも、一層一般的、一層連絡の緊密な、一層堅固な組織が、時代に先行し、従つてそのために多数者の無理解、無関心と、否、しばしばその敵意とすら戦わねばならぬ吾々運動の如きものに於ては、恐らく避けがたいものと思われる誤解や不満を一掃するまでには、仮令至らずとも、力と成功の重要な要素、即ち吾々の思想の眞価を発揮するために力強い手段となることは疑いないことであると、私は確信するものである。従つてこのロシアの同志達の示唆に対しても私は同情の眼を以てこれを見たいと思う。

先ず何よりも前に、民衆がその生活状態の改善とその解放を追求する闘争の途上に於て、それに対する影響力をうるために、無政府主義者が互に組織せんとする場合この示唆は有効且つ緊要なものであると私は考える。今日社会変革の大なる力は労働運動(労働組合運動)と共にあり、今日に於ては次の革命によって行われる事件と、究極目的のすすむべき進路はこの運動の方向如何に関することと多

大である。労働者の利益擁護を基底とする組織によって、労働者は身に加わる抑圧と資本家に対する反対の位置にあることを自覚し、生活上の向上を熱望し始め、共同の闘争と連帯とに馴れ、遂には資本主義的国家主義の支配に随伴する一切のものを征服して、一挙に改造を成就することができるようになるのである。とは言ふもののその革命か反動かの定まるのは全くこれから後のことなのだ。

(注) 括弧内の語は原筆者の挿入せるものである。

無政府主義者は労働組合運動の有効なることを認め、この発達を健全ならしめ、且つ、労働組合がその協働と階級の廃止、凡ゆる人間の完全なる自由、平等、及び連帯を導き出す社会革命へまでの進展の他の諸勢力を増進するために努力する時、無政府主義者はその労働組合の行動の原動力とならねばならないのである。労働運動の為とところが如何に大なりとも、労働運動がそれ自身の手によって全く独自に上述の如き革命を誘起するものと信ずるのは、憐むべき幻覚である。事實は即ちその正反対である。物質的な直接の利害に基底を置く(またそれ以外のものを基礎としては大なる労働運動は成し得ないのであるが)運動に於てはすべて、激助の要素、即ち衝突の要素が含まれてゐる故に、未来に理想をおいて自らを犠牲にして闘争する思想者の活動が必要である。かかる原動力なしには、いかなる運動も必らず周囲の状況に順応することを求め、自己擁護の精神を生み、それに依つて以前に優る条件を維持するために、変化に対する恐怖心を抱くようになる。ここに屢々新しい特権階級が生れて、彼等は遂に人のそれを打ち倒さんとしている社会状態を作り出してそれを確保しようと努力するようになるのである。

労働組合の内外に於て、無政府主義の実現のために闘い、墮落と反動との凡ゆる萌芽を蹂躪せんとするそれ自体無政府主義の組織が緊要事である所以は、全くここにあるのである。

併しながら、無政府主義の目的を達成せんとする無政府主義の組織は、その構造と活動とに於て無政府主義社会の原則に一致しなければならぬのは明らかである。従つてその組織は決して強権の精神にとらわれず、各個人の自由行動を共働の必要と結びつけることが出来、その同僚の創造力の自覚とその能力とを発達せしめる為に役立ち且つその活動区域内に於て予見されたる未来に対する教育の手段と物質並に精神的準備をそなえるものでなければならぬ。

然らば、この当面の草案は果してこれらの必要条件を満たすものであろうか。私は信ずる。否と。私の見るところによれば、この組織案は、無政府主義者をして組織を造るという大きな希望を抱かせることよりは、むしろ却つて組織を造るという事は直ちに指導に身を托して、あらゆる自由創造の力を萎縮せしめてしまふような、あの特権的中央集権的組織に入るといふ意味の偏見を強からしめるもののように思われるのである。

事実にも、また、有名な無政府主義者が組織となつて、その周囲にすべての人を集めるために、二三の者を、明白な事理と吾々の反対とを犯してまでも頭首の位置に置くという提議がこの案の規約には含まれてゐるのである。

二、かくのごとくこの案を見ているならば、次いで私に考えられることは、すべての無政府主義者を一の「総聯盟」即ち草案に示された様に、一の革命的活動団体へ統一するというのは、謬見である（また如何なる場合に於てもそれは実行不可能なものである）ということである。

若し、「協盟」という語が同一の立場に立ち、共通の要求を有し、且つ何等かの方法によって共通の敵手と共通の反対者とに対抗して、同一の目的を求めて戦うすべての人の団体という意に解するならば、吾々無政府主義者はすべて同一の協盟に属するといふことができよう。しかしながらそれだからといって、吾々すべてが単一の聯盟に団結することが可能であるということにはならないし、また、それが可能だとしても、恐らく少しも望ましいものでもあるまい。

あたかも個性の差や、個人的の不和のごとく闘争の行われる環境と状態とは互いに差異が多く、各自独特の選択にしたがって採用する行動形態は、あまりにも数多くあり得るものであるから、仮令、真にそれが実現されたとしても、一の総聯盟なるものは、すべての勢力を集めてそこに包括する手段となるよりは、むしろ多く各個人行動の衝動を阻害し、また内部闘争激化の一誘因ともなることである。

例えば、民衆の中にあつて宣伝とアジェンションとに従事することを目的に設けられる表面的な団体と、その土地の政治的關係から、その運動に際して敵手の前にその見解や手段や構成者を隠しておかなければならぬ秘密の団体とを同じ方法により、また同じ構成者を以て組織することがどうして出来よう。一方には宣伝と行動を以て逐次に個人を革命し、ついに社会の革命に及ぶことを以て、ある程度まで十分であるという見解をとる啓蒙派があり、他方には、ただ力によつてのみ支えられている社会状態は力を以てこれを覆し、また圧制階級の力に対抗して、自由な宣伝と思想的成果の実際の適用のために必要な社会条件を造り出さねばならないと信ずる革命派とがあるとき、この両者がどうして同じ戦術を採ることができよう。また特種の理由から無政府主義の闘士たることを好まぬ人々と、反対に特殊の理由からそれに適し、且つ有為の人士とを、どうして合同せしめることが出来よう。

更にこの草案の発案者は、方向を異にする無政府主義者の代表者が参加すべき組織を作るといふ考えを発表しているが、これはバカらしいことである。かれらのいうところによれば「理論に於てまた実践に於て相対立する分子をその中に包含するところのかくのごとき組織は、無政府主義運動の遭遇するあらゆる問題について種々に見解を異にする個人の機械的集団にすぎないものとなることであるうが、それは事実と實際生活による証明によつて、必ず決定されよう」と。

いかにもこれは、尤もなことに違ひない。しかし、最初から方向を異にする無政府主義者の存在を知っているのなら、彼等はそれらの方向をとる無政府主義者に対してはまた彼等は彼等としての方法で組織し、その最も善しとする無政府主義の間に運動する権利を

認めねばならないはずだ。それともまた彼等は、かれらの提案する計画を採用せぬものは、すべてこれ無政府主義の埒外に放逐して、連絡を絶とうというのであらうか。彼等の企図するところは如何にも、自由のために運動内に於けるあらゆる健全分子は当然彼等のごとく思惟する者にのみ限られてこよう。しかし、その場合、不健全なる分子に対して、かれ等はいかなる処置をとるといふのだ。

自ら無政府主義者と名乗る人士の中にも、いかなる人類の団体に於ても見得るごとく、その価値を異にする分子が存在し更に悲しむべきことには、無政府主義を名として、全くいかにがわしい非似ものも提議するような思想をふりまくような者があることはいかにも確かな事実である。しかし、どうしてそれが避けられよう。無政府主義の真理は一個人、若しくは一委員会の独占物に止まることは不可能であり、また許されぬことである。その真理は実際の多数、若しくは仮定的多数の判断によつて左右することは出来ないものである。

必要にして十分なることは、万人が自由批判の完全なる権利を持ち、且つ、それを行使することは各人が自分自身の思想を抱き、且つ、互に自分の同志を選択することができるとのみである。上述第二にあげた場合において判定をあたえるものは事実であつて、ここに於て実際に正しい者が正しいとせられるようになるのである。

三、

上述のごとくすべての無政府主義者を一の組織中に統一せんとする思想はしばらく措いて、この「総聯盟」なるものが実際に存在するもの、即ち、頼むに足る数の無政府主義者の聯盟と仮定して取扱ひ、この提案の組織形態が無政府主義の原理と方法に適うものであるか否か、またそれが無政府主義の勝利をみちびき出すものであるか否かを検討するならば、この場合に於てもまた、これは真でないとは私に考へる。私は決してこのロシアの同志諸君の真摯な無政府主義に対して、何等の疑をも挿はさむものではない。なぜならばかれ等ののぞむところは即ち無政府主義を実現し、且つ出来るかぎり急速にそこに到達する方法を求めることであるからだ。しかしながら一事を望むといふことで万事十分だといふ訳には行かない。それを支えるに適當な手段をとらねばならぬことは、なお、目的地に到達するためには、そこに行く道をえらぶことが必要となると同様である。若しそうでなければ、他の場所に出ることになるからである。ところが、この提案のごとく強権的性質をふくむ組織は全くたんに無政府主義の勝利を容易ならしめなければならず、それは無政府主義の本義を誤まつて、その組織者たちの期待に反する結果をもたらすことにもなる。

実際の場合、この「総聯盟」は、政治的技術的活動を精神的に管理するために書記の職があると共に、きわめて多く部分組織より成立することに、一の実行委員会が存在して、その聯盟の議決を実行し、思想界や諸団体の組織をその聯盟の思惟体系とその他の一般戦術の方向に一致するように誘導することを、聯盟より委託せられることになる。

これでもなおこれが無政府主義であると言えようか。私の見るところを以てすれば、これこそ政府であり、教会である。ただ、この場合には上から指命された思惟をよろこび待つという信者を欠ぐとともに、警察力と武力とを欠ぐのはなるほど事実と相違ないがそ

のことはただこの政府が無力、無為であり、この教会が単なる分派と異教との闘争場裡にすぎないということを意味するに過ぎない。その精神と方向とは共に変わりなく強権的であり、その教化の結果はつねに反無政府主義的であらう。

見よ、「この一般的自由運動の実行機関、即ち本無政府主義聯盟は連帯責任の原則を採用する。即ち、全聯盟は各同志の革命的政治的活動に對して責任をもつ。」とかれらは言うのだ。

しかも判断と行動とに於けるあらゆる個人の自主とあらゆる自由と、これらをかくのごとく徹頭徹尾否定し去ったのち、この草案の起草者達は無政府主義が名実共に自由聯合主義者であるという事実を想起している。即ち彼等は中央集權主義を呪って、その不可避の結果は奴隸制度と社会生活の機械化と党派的生活とをもたらすものであると断じているのだ。

しかしながら、若し、この聯盟がその同志各自の行動に對して責任をもつものとすれば、特定の、また相異なる群団に属する各聯盟員に對して、その聯盟の正當なりとする形式上共通の計画の採否に就いての自由を許しておくということが一体どうして出来るのか。ある行動について、それを防止する力がない場合、どうしてその行動に對する責任を持つことが出来るか。かくのごとく聯盟が、また、その聯盟に對しては実行委員会が、その聯盟員すべての活動に對して特に監視の眼を向け、その為すべきことと為すべきことから指図しなければならぬのだとすれば、全き現実の否定が、あらかじめ形式的に定められた引責によつてこれを釈明し得ないものである以上、この委員会の賛意と許可とを得ないでは、もはや誰れも何の行動をも為し得なくなるであらう。また、反対に個人がその共同団体の為さんとすることの何たるかを知らずしては、彼にしてもその団体の活動に對して責任を持つことは出来まい。しかも尚その団体が彼の反対することを為さんとする場合、彼はどうしてそれを阻止することが出来るか。

さらにこの草案の起草者に從えば、諸事の管理に當らんとするものは、この聯盟であるという。ところが、聯盟の意志なるものが果してその聯盟員すべての意志ということができるか。もし出来るとならば、そのためには聯盟員すべてが、あらゆる問題について常に同一の見解を持つことが必要にならう。従つて、彼等はすべて一般の根本原則に關して多数決を以てこれを決定しなければならなくなるのは極めて當然である。なぜなれば、この多数決なしには言うまでもなく斯く團結することは出来ないであらうから。しかしながら、思想をもつほどの人間は、種々の環境のもとに於てまざるべきこと、さらに誰れが決議の最適任者であるかということに就いて、つねに同一の見解を持つとは考えられないことである。

この草案の原文より實際の場合に於て起こってくることは、この「聯盟の意志」ということが、ただ「多数者の意志」ということを意味するにすぎない。即ち、この実行委員会という會議によつて突きつけられる意志によつて統御せられ、また重要問題はそれによつて、すべて決定を与えられるというに過ぎないということである。この會議は當然、多数の支持を有する群団に於て選ばれた代表者によつて構成せられ、また、この代表者達もまた多数決によつて、その為すべきことについて決定される。厚意の眼を以て見ても、な

お、決定をあたえるものは斯くのごとく多数者中に於ける多数決である。しかしこの多数者がきわめて数が多い場合もありうるが、また、殊に二つ以上の見解が存在する場合に、ただその中の多数決のみが代表せられることになる。

真にブルジョア議會と執行機関に對するその支配力とは、それが強権的の力を有するかぎり、機宜を得た、また實際上機宜を得たものであることは殆んどあり得ないことでもあらうが、無政府主義者が現に生活し、且つ、闘争しているような社会条件のもとに於ては、その會議に代表者を送りうるものは一層少数（即ち代表者を送り得るものは無政府主義者全体の中の一層少数の部分）であるという事實は真に注目し得るものである。無政府主義者の會議が求めるものは誰がその會議を企図し、またそれを開きうるかということ、即ち誰がそれに要する資金をもち、または調達し、誰が警察の監視に妨害せられずに済むかということである。そこに集まるものは多数の同志を擁する団体の意見と希望とを代表するものというよりは、むしろ、常に、ただ自分一人の代表者若しくは少数の友人を代表する者である場合が多いのである。委託された事項、及びその価値についての真摯なる審議も、スパイや裏切者の予想に對する惡意のために、全く不可能なことである。いかなる場合をとつてみても、提案のごとき組織形態に於ては、吾々は完全な多数制と完全な議會主義とに陥入ることになる。

周知のごとく無政府主義者は多数者の政府（共和政府）を包含するとともに、少数者の政府（貴族政体、寡頭政体、階級政体、もしくは党派政体）をも、また更に個人の支配（独裁××政治、專制政治、個人的独裁政治）をも認めぬものである。

所謂、多数者の政府というものは、従来、無政府主義者が幾百度となく批判し來たごとく、それを実際に適用する時はつねに一部少数者の支配に陥るものである。ロシアの同志諸君は果してこの愚を繰り返して、それによつて何等かの利用を求めんとするのであるか。

共同的社会生活、団体的生活に於ては、しばしば少数者が多数者の見解に順応する必要がある場合の起ることは、真の無政府主義者たる者はこれを知っている。何か万人の共働を必要とすることを為すことの必要なる場合、またその有用なる場合には、少数者は多数者の意志と一致することの必要なることは理解しなければならぬものである。その他、一般の場合に於て、共に平和と平等の社会状態と生活とをいとなむためには、万人が協調の精神によつて相互の忍耐と相互の適応とを盛にすることは必要である。しかし、聯盟者の一部が他の部分に對してなす適応は相互的、自由意志的のものでなければならぬ。それは社会的生活をその反抗のゆえに停滞せしむることを怖れる各人の、上述のごとき必要に對する自覺とその意志によつて導き出されるものでなければならぬ。それは原則として、また根本に於て、強制によるものであってはならない。それが一般社会的生活の實際に於て、恐らくきわめて困難な理想であることはいかにも事實であらうが、あらゆる人類の群団が無政府社会に近づけば近づくほど益々自由に、益々内面的に、また一層ただそのことの本質のみによつて多数者と少数者の間における数の差の問題が解決されるようになって来るのである。

通常の人類社会に於いて、個人は孤独に生活しているとつねにその生活条件を失つてしまふので、強制的にある一定の制限を受け容れさせられているのであるが、上述のごとく無政府主義者が斯くのごとき社会に於ける支配権を多数者より剝奪するとき、彼等（無政府主義者）の企図する処が、各人が万人との自由合意によって自らを解放せんとすることにあるとき、その本質に於て自由な、しかも自由意志的な無政府主義の共同団体に於て、多数者の支配を認め、且つ、たとえ自分の知らぬものでもなお、多数者の決定に対しては服従を誓うことが一体どうしたら出来るというのだろう。

無政府主義とは、即ち多数者の少数者に対する支配のない自由の組織であるということ、従つてまた無政府主義を知らぬ人々が、空想、若しくは遙かに遠い将来でなければ実現不可能であるとかいつて非難するのは、諒解のいくことであるが、無政府主義学説について知り、×××社会の実現の日の一日も早からんことを祈つて、自らそれに接近しようと心から努力している人達が——この人達までが、無政府主義の勝利のために有用なその組織に於て、直ちに無政府主義の根本原則を否定するという事実は諒解しがたい。

四、

者無政府主義の組織が依拠せねばならぬと私の信じている基底は、このロシアの同志諸君によつて提議せられたものとは大の相違がある。完全な自律と、完全な自主、またその結果として個人及び群団の完全な責任と、共同の仕事を行つたために一旦と結びつけた契約に対しては道義的義務を強調するために、また容認せられた予定計画と相容れないことは、これを企図せぬようにするために、団結を有なりと信する者同志の自由合意とが、即ちこの基底である。この基底の上に立つてのみ、その組織に活動力をあたえるところの実際の形態と適当な機関とを生み出し、ここに群団、群団の聯合会、聯合会の聯合、聯盟、大会、委員会が出来て、通信その他の機能を委託せられることになるのである。しかし、個人の思想と創造力とを妨げず、ひたすら単独でなければ実行の不可能な、若しくは不可能に近い行動を尊重するためには、これらのことはすべて自由に為されねばならない。

かようにして大会は規範を設け、他人にその決議を強制することを企図せぬ以上、あらゆる欠点と専制策動とにより解放せられるであらう。最も活動的な同志間に於ける個人の分担を正しく定めて相互の理解をはかり、行動の手段方法に関する研究を鼓舞して、結論をひき出し、すべての同志が、種々の地方における情勢に通じ、無政府主義者間に行われる種々の見解を明確に発表して、それに関する一種の記録を作製するために、この大会に役立つのである。このとき、この大会の議決は義務的の法則ではなく、すべての関係者が受け容れるところの誘導であり、勧告であり、提議である。その議決は、それを容認する人に対してのみ、またその容認する範囲内に於てのみ、その人々の義務となり、また、彼等によつて実際にも遂行せられるであらう。連絡委員会、その他と呼ばれる管理機関は如何なる指導権力をもたぬ、即ち、これらの機関は、その意見をすべての同志の群団内に自由に宣伝普及するが、それを強制する強権をもたぬから、全組織の公式的な見解として発表することはできないのである。

かくの如き機関は群団または個人が合意するところの大会の議決や提議を發表する。これらの議決や提議は諸群団間の分担を容易ならしめる目的を以て、それを採用する同志のために、また種々の問題について同一の見解に立つ同志の共働のために役立つものであるが、また、各人がよき同志なりと信する者と直接に連絡すること、または特定の群団によつて指名せられた他の委員会のために働くことは自由である。

無政府主義の組織にあつては各構成者は、それが容認せられた原則に反せず、且つ、他の同志の活動に妨害をあたえぬかぎり、あらゆる見解を通じて、すべての戦術を採用することが出来るのである。いかなる場合に於ても、いずれの組織にせよ、それが持続せられるのは団結の理由がそれを解散する理由よりも力強い間のみに限られているのである。しからざる場合に於ては、すなわち、その組織は解散されて、他の同種の群団に席をゆずって行くのである。今日、吾々の従事すべき闘争に於ける組織の継続は吾々の成功のために確かに予備的条件となるものではあるが、他の一面、いかなる機関もたしかに本能的にその永久の存続を望むものであるが、自由の組織に於て、その存続はその組織構成員の社会的共同の精神と、その組織が情勢の変化に対する適応能力との結果でなければならぬ。有力な活動をなし得なくなった場合に於ては、その組織はむしろこれを捨てるほうがましである。

ここに至つて、私が上來、論じきつた、また従来、幾度か史上、いろいろの時代にその姿を現わしたところのあるところの、かような組織が、効果の少ないものであることは、ロシアの同志諸君も恐らく諒解せられることであらう。これらの同志諸君はその故国におけるボルシェヴィストの成功に幻惑せられているのである。

なぜならば、彼等はボルシェヴィストの例にならつて思想的にもまた實際的にも、二三の指導者たちの指揮のもとに進軍し、現在の政府を攻略して、物質的勝利ののちに於て新しい集合社会の結成がはじまらねばならぬと信じる。訓練された一種の軍隊として、無政府主義者を統一しようとしているからである。従つて、もし指導者としてこの組織に関係する無政府主義者たちが、天賦の才に恵まれた人達であるならば、なるほど、この組織を採つても、吾々の物質的力の増大することは、おそらく事実かも知れないが、その結果は果していかなるものであらう。無政府主義がロシアに於て、社会主義や共産主義の達したような境地に出づることにはなるまいか。この同志諸君が必死に成功を求めておられることは真実ながら、生活と勝利とを得るためには、生活があたえる合理的論証を否定し、暫定的勝利の属性をもつて、その本質と見誤ることは必要のないことである。吾々はたまた、且つ勝つことを求める。しかしながら、吾々ののぞむところは、ただ無政府主義を以て立場とし、×××社会を以て目的としてのそれのみである。